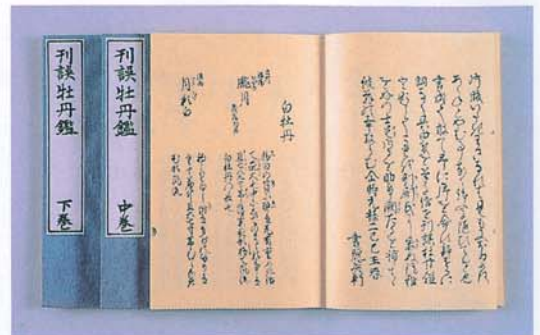


小笠原 亮

「牡丹名寄」と 「刊誤牡丹鑑」

雑花園文庫蔵



「刊誤牡丹鑑」 晩英軒序 元禄二年刊



「牡丹名寄」 團水白眼序 貞享五年刊

奈良時代に中国から薬用植物として渡来したといわれるボタンに関する本や資料は多い。なかでも今回紹介する「牡丹名寄」「刊誤牡丹鑑」はわが国で印刷されたボタン専門書の最も古いNo.1とNo.2であると確信している書物である。

名寄のほうは著者は不明。序文は團水白眼なる人、貞享五年春（同年九月改元、元禄元年、一六八八）京都定屋丈助開板で上下二冊。内容は序、後跋以外はすべてボタンの品種解説であり、上巻は白色系を収録し品種名とその色や形など特徴を解説したものが一七種。品種名のみが四〇種。下巻は紅色を主とした色物を集め解説付が一〇六種、品種名のみが三七種、上下で三〇〇種が数えられる。

一方刊誤のほうは著者は明確ではないが、序は晩英軒なる人、序文の内容から著者であるらしい。元禄二年春、定屋丈助開板、上中下三冊、前者と同様の装幀である。

内容は上巻が白系一六種、中巻が紅系で一八種、下巻は薄色紫類三四種と栽培として土拵様、肥料などが書かれ、品種はすべて解説付である。

名寄の跋に著者は「ほんの少しの見聞知識で書いたのでまだ〳〵名ある品種も多いと思うので気付いた人は出版元まで申し出てほしい云々」と書かれている。それを受けて、刊誤のほうは「名寄」で間違っていたり不足を補うのであるとその間の事情を詳しく序文中に書いているのが面白く、元禄初年、京都を中心としたボタンの栽培熱と品種を知る貴重な文献である。